

(対象事業：地域連携強化事業・地域文化資源整備活用事業・ミュージアム支援地域人材育成事業  
国際交流拠点形成事業)

事業名：古代染織品の保存・活用に関する国際研究交流

事業者名：東京国立博物館

住 所：東京都台東区上野公園13番9号

TEL：03-3822-1111（代表）

FAX：03-3827-8504

HPアドレス：<http://www.tnm.jp/>

連携事業者名：国立絹博物館（中国 美術館博物館）、メトロポリタン美術館（米国 美術館博物館）、ベルギー王立文化財研究所（ベルギー 研究所）、サザンプトン大学（英国 学校）、アベック財団（スイス 研究所）、大英博物館（英国 美術館博物館）

会 場：東京国立博物館（東京都台東区上野公園13番9号）

宮内庁正倉院事務所（奈良県奈良市雑司町129）

事業期間：平成21年10月1日～平成22年3月15日



## 1. 館の使命と本事業の関係

### (1) 館の使命

東京国立博物館は、有形文化財の展示と、その保存修復に努めるとともに、貴重な文化財に関する調査研究の成果を活かし文化財保護の重要性について理解を深める事業を展開し、歴史・伝統文化の発信拠点として尽力している。

### (2) 本事業との関係

日本では、世界的にも特筆すべき稀少な文化財を数多く所蔵しているが、研究者がそれらの作品を実見し、共通の理解のもとで議論をする場は、従来もたれることが極めて少なかった。

また日本に現存する日本独自の文化財や、世界的にも稀少な文化財の多くは、古くから継承される日本特有の優れた修理方法によって保存されているものが少なくない。そうした修理方法は、日本古来の文化財について有効だけでなく、国籍や分野を超えて、他分野についても広く援用されうる可能性が高いものでもある。

また、各専門分野の立場からは、現在日本で行われている修理方法に有益な情報を提供することも期待できる。本事業は、従来、外部の研究者や技術者が実見する機会がなかった博物館の収蔵品について、積極的に調査・検討の場を広げ、学際的かつ国際的な学術交流をはかろうとするものである。作品そのものに関する新知見はもとより、古くから培われてきた優れた修理技術を各分野の研究者に紹介し、あわせて専門家だけでなく一般の方々をも対象にシンポジウムを開催することによって、文化財の保存・活用・普及に関する、国際的な交流の拠点となることが期待される。

## 2. 企画内容

### ①事業目的

東京国立博物館が保管する法隆寺献納宝物には約50件1000点に及ぶ染織品が含まれ、これらの多くは飛鳥から奈良時代に制作されたもので伝世品としては世界最古の染織コレクションである。当館では昭和47年（1972年）から継続して、主に展示を前提とした修理と調査を行ってきた。本事業はこれらの研究成果を共有すべく、制作技術、材質分析、保存修理技術などに関わる国内外の専門家が集い、調査見学、ワークショップやシンポジウムなどの研究交流をする機会を設け、古代染織品の保存と活用に関する学際的で、かつ国際的な研究交流を行うものである。

### ②事業概要

東京国立博物館では、歴史・伝統文化の発信拠点となるべく、さまざまな事業を展開している。なかでも世界的に稀少な法隆寺献納宝物の染織品・上代裂については、修理・調査の成果を研究誌「ミュージアム」に発表するとともに、修理後の作品を一般に公開してきた。しかし、上代裂の作品を研究者が実見し検討する機会は少なかったのが現状である。本事業は上記の実情に鑑み、制作技術、材質分析、保存修理技術などに関わる国内外の各専門家を招聘し、修理前の現品を実見する機会をもち、共同で調査を行おうとするものである。上代裂に関する修理方法は、必ずしも確立されているわけではない。各分野の研究者からの新知見を共有し、将来的な修理方法の検討も含めて、ワークショップを開催し、またシンポジウムを通して、研究者はもとより一般の方々にも上代裂に関する理解を深めていただき、今後の古代染織品の保存・活用そして普及に役立てたい。

### 3. 事業実績

#### (1) 事業の主な内容及び日程

##### 1) 事業の概要

- ①館内調査 法隆寺宝物館所蔵「上代裂」調査
- ②館外調査 正倉院「制作・修理・保管の現場」
- ③ワークショップ「染織品の収納と保管」開催
- ④国際シンポジウム「古代染織品の保存—製作技法・材質分析・保存修理—」開催



国際シンポジウムにおける質疑応答

##### 2) 事業日程

実施時期	計画事項			摘 要
	①調査会	②国際シンポジウムの開催	③ワークショップの開催	
12月14日		国際シンポジウム打合せ	ワークショップ打合せ	出席者6名
12月15・16日	登録および第1回調査会（館内）			出席者18名
12月17・18日	第2回調査会（館外）			出席者18名
12月19日			ワークショップ開催	出席者18名
12月20日		国際シンポジウム開催		出席者18名
1月			記録整理・編集	
2月下旬			報告書刊行	

#### (2) 参加者の数

参加者人数	延べ 約290人
内 訳：	
・調査会	約 20人
・ワークショップ	約 30人
・シンポジウム	約240人

#### (3) 事業により作成した印刷物等

- ①チラシ
- ②ポスター
- ③事業報告書

平成21年度文化庁美術館・博物館活動基盤整備支援事業  
「古代染織品の保存・活用に関する国際研究交流」

#### (4) 実施事業に関する新聞記事等

##### ○新聞記事

該当なし

##### ○テレビ、関連誌等

該当なし

#### 4. 事業の成果及び今後の課題（参加者の意見を含む。）

##### （１）事業の成果

###### １）館内調査

時 期：12月15日・16日

場 所：東京国立博物館 法隆寺宝物館など

参加者：研究者18名

内容・目的：東京国立博物館が保管する法隆寺献納宝物には約50件1000点（未整理品約800点を含む）に及ぶ染織品が含まれている。これらの多くは飛鳥から奈良時代（7世紀後半から8世紀前半）に制作されたもので、伝世品としては世界最古の染織コレクションとして著名であるが、従来、外部の研究者がこれらの染織品を実見・調査する機会は少なかった。本事業ではこうした状況に鑑み、内外の専門家を招へいし、実見・調査をする機会を設けた。本調査では当館における従来の研究成果を示し、各国研究者との新知見を共有した。これらの新知見から今後の保存と活用に新たな展望が開けた有意義な調査会となった。

###### ２）館外調査

時 期：12月17日・18日

場 所：正倉院など

参加者：研究者18名

内容・目的：正倉院の資料の希少性については周知の通りである。本事業では、館内調査・国際シンポジウム・ワークショップを開催し、内外の研究者が最新の学術情報を共有し、共通の地盤に立脚したうえで、改めて正倉院の古代染織品を実見・調査しようとするもので、これによって古代染織品に関する今後の保存と活用に関する中長期的な展望を開くことを目的としている。本正倉院での調査においても各国研究者との新知見を共有した。これらの新知見から今後の保存と活用に新たな展望が開けた有意義な調査会となった。

###### ３）ワークショップ

時 期：12月19日

場 所：東京国立博物館 本館会議室

参加者：研究者18名

内容・目的：上記①・②を経たうえで、内外の研究者が、各専門分野・所属機関の立場から、「古代染織品の保管と公開」にテーマを絞ったワークショップを開催した。内容は専門家を対象としたもので、内外の研究者が最新の学術情報を共有した。これら館内調査・館外調査および本ワークショップにおいて、国際シンポジウムに向けた研究成果の共有が図られた。

###### ４）国際シンポジウム

時 期：12月20日

場 所：東京国立博物館 大講堂

参加者：研究者18名、一般の聴衆者240名

内容・目的：資料１の研究者が、①の館内調査で得た問題点を明確にし、各専門分野・所属機関の立場から、「古代染織品の保存—製作技法・材質分析・保存修理—」に関する現状の報告と今後の展望に関する発表をし、全体討論を行った。発表者は資料１の研究者であるが、予めウェブ上やチラシ・ポスター等によってシンポジウムの開催に関する情報を提供し、一般の聴衆者を募った。発表内容は、あくまでも一般の方々にも分かりやすい内容とした。一般参加者は２００名を数え、質問内容もクオリティの高いものばかりで一般の方も、古代染織品への関心が高く専門家のみならず一般の方々をも対象に国際的な交流の拠点となる所期の目的を達成した。

## （２）今後の課題

### １）上代裂現品の共同調査

東京国立博物館および正倉院事務所が所蔵する上代裂に対して、国内外の専門家が共同で調査に当たることができたのは大きな成果である。東博と正倉院に混在する法隆寺裂と正倉院裂に見られる染織技法の特徴を把握しつつ、両者を確実に分離するための調査は今後とも必要である。またそうした成果をもとに、世界各地に分布する上代裂の正確な位置づけを行うことが求められている。今回の調査はある意味でその端緒に就いただけであり、今後継続的な共同調査が求められる。

### ２）将来的な保存・修理方法の検討

東京国立博物館において上代裂に関する保存・修理方法は必ずしも確立されているわけではない。そのため、ワークショップとシンポジウムを通して、制作技術、材質分析、保存修理技術の交流を実施し、それによって得られた知見から今後の方針の確立を試みたいところである。しかし、言葉や映像による理解だけでは不十分であり、現地に赴いて現物を直接観察することで、初めて理解される部分もあることから、研究者相互の交流によるより具体的な理解が今後の大きな課題となる。